

広見屋敷の怪談

猫ヶ村
殺人事件

武田 満

猫ヶ寺の若住職に見合い

猫ヶ寺の若住職に見合い話が来たのは、一週間ほど前の十一月十日のことである。町の旅館の女将の紹介だった。なんでも古美術商の娘さんで、稀に見ぬ美女だと言う。若住職は大急ぎで名刺を作り、スーツを新調した。まさか法衣で行くわけには行くまい。見合いには、猫ヶ村の村長である上杉定雄が立ち会ってくれることになった。

猫ヶ村の人口はわずか四人である。今年三十になる若住職を除くと、全員が七十を超えている。年金に加え、細々とした農営があるだけの、何もない村である。寺の檀家はたった三軒しかない。建物が古いため頻繁に修繕費を要したが、毎月の村長のお布施と、若住職のアルバイトで、貧乏寺ながらもなんとか存続していた。先月などは、村長自らがコテやヘラを持って庫裏の壁を塗り替えてくれた。廊下に埋め込まれた古地図を外してニスを塗ったため、その一区画だけがやけに艶やかになったが、やはり、今にも朽ち果てそうなボロ寺である。

新品のスーツを着た若住職は、村長宅の前に中古のワゴン車を停めた。このボロボロのワゴン車こそ、この村で唯一の交通手段である。若住職は、聖職者などというよりは、お経もよめる雑用係だった。村民の運転手であり、農作業の手伝いであり、買い物係でもあった。人柄がよく、体力も腕力もあるこの若住職こそ、猫ヶ村に不可欠な存在である。しかし村人の心配ごとは、そろそろ三十になる独身男の嫁の問題だった。まさか嫁を迎えられるような村ではないし、そもそも若住職には家族を養うような収入がない。それは一部で檀家のせいでもあるのだが、そこへ飛び込んできた見合い話に、村は騒然となった。

こんな村へ来てくれる嫁がいるはずがない。逆に婿に欲しいという話ではないのか。若住職を失ったら、村はどうなるのか。村長も眉に唾をつけながら旅館の女将に何度か電話をかけたが、その娘さんは、確かに静かな農村へ嫁ぐことを希望しているらしい。若住職の人柄を話し、写真を見せたら、ぜひお会いしたいと言ってきたらしい。

「そんな嘘くせえ話があるわけねえ。あんな貧乏寺だ」

今年七十二になる黒川宗太郎が村長に言った。

「しかし、会ってみねばなんともなんとも言えぬしのう」

村長は、数年ぶりのカッターシャツに腕を通しながら応えた。この村でシャツにアイロンをかけられるのは、黒川の横に住む千代という七十八歳の老婆だけである。その千代が、村長と若住職の白いシャツにアイロンをかけてくれた。若住職は、ワゴン車の運転席で大きな体をピリピリと緊張させていた。

「たしかに静かな村にや違いねえが、鶏だけは絞めねばならんのう」

鶏は、早朝のまだ暗いうちから鳴きはじめる。

「玉子も食べぬ村になるのう」

村長は、どことなく不機嫌に言った。

「住職殿、今、何時じゃ」

若住職は腕時計を見た。彼の持ち物の中で唯一の高級品が、母親から贈られたこの電波時計である。この村で腕時計をしているのは若住職ぐらいである。農業のほかは年金暮らしの村人に、時計など必要なかった。若住職は町へアルバイトに行くため、腕時計を着ける習慣が身についている。

「もうすぐ、四時半です」

と、若住職は応えた。

十一月十七日、見合いは、二十年ほど前まで猫ヶ村の住人だった猫頭左門という老人が経営する「呑み処ネコガシラ」という名の居酒屋で行われた。その夜は酒を飲むこともあって、見合い相手と同じ旅館に泊まることになっていた。北見と名乗る親子は先に来ていた。店の一番奥の座敷で、娘の由紀は奥の壁際に、その右に北見祐次が背筋を伸ばして座っていた。

北見祐次の名刺には古美術商の肩書きと、東京にある事務所の住所が書かれていた。娘のほうは名刺を持っていなかったが、由紀と申します、と自己紹介した。こんな季節にもかかわらず、白く清楚なワンピースで、透けるように白い肩を露わにしていた。若住職は、なんとなく眩しくて、彼女の顔をまともに見ることができなかった。

「旅館の女将さんから住職さんのことをうかがいました。実はこの町に移り住むことになりまして、娘は、今年二十五歳になりますが、町の喧騒が嫌いなようでして」

父親の言葉に、彼女はコクリと頷いた。

古美術商の北見は、美術品を探して日本中を歩き回るのが仕事で、妻とは五年ほど前に死に別れ、今は由紀が事務の手伝いをしている。ある程度の資産ができたことと、この町の景色が気に入ったことで、この付近に土地を買って住むことにした。由紀が嫁ぐことになったら、お寺にはそれなりの援助をさせて頂くつもりだ、とも言った。遠まわしに、我々は資産家だから貧乏寺でも構わない、という意味にも聞こえた。

確かに願ってもない話だが、村長は、当たり障りのない話を繰り返しながら、なんとか北見の本音を聞き出そうと、酒を酌み交わした。しかし若住職は、気恥ずかしさから膝ばかり眺め、ときどき由紀が注いでくれる酒を、ペコペコと頭を下げて飲んだ。さっぱり酔えなかった。

「あの、住職さんは」

ふいに由紀に声をかけられて、若住職は、はっと顔をあげた。

「はい」

「住職さんのご趣味は」

「あ、たいした趣味はありませんが、推理小説を、少し」

「そうですか」

趣味を聞かれたら読書と映画鑑賞と答える予定だったが、つい本当の趣味を答えてしまった。推理小説も読書のうちだが、イメージが悪い。

「わたしも好きですよ、推理小説」

「そうですか」

それ以上は何も言えず、会話は行き詰ってしまった。しかし若住職は、淑やかで清楚な由紀の口調に、どこかしら挑戦めいた響きを嗅ぎ取った。

当人たちを無視して、北見と村長が話を進めた。とりあえず日を改めて来週の土曜日、ふたりは映画館へ行くことになった。つまりデートをしろということである。映画なら会話をしなくて済むから、気の弱い若住職でも大丈夫だろうということらしい。その後は、若住職が由紀にこの町を案内することになった。由紀と若住職は、次々と決められていく来週の予定を頷きながら聞いていた。

「せっかくなら猫ヶ村を案内して頂いてはどうか、由紀」

と北見は言った。村長は曖昧に頷いた。猫ヶ村には案内するような場所が一箇所もない。見せたらすぐにでも逃げられてしまいそうだ。しかし、なんとか二時間の見合いを無事に終えることができた。

旅館の部屋で落ち着いた村長と若住職は、ネクタイをゆるめて座り込んだ。

「こんなに緊張したのは初めてです」

若住職は、部屋に用意されたポットのお茶を飲み干して言った。

「なにやら、話がうますぎるようじゃの」

村長の顔も疲れていた。そこへ女将が入ってきた。

「お見合いはどうでしたか、村長さん」

「いや、信じられぬというのが本音じゃ。住職殿のどこが良いのかのう」

若住職には失礼な話だが、女将も首を捻った。体は大柄で立派だが、学や収入があるわけではない。もう少し立派な寺なら話もわかるが、百年も前に本山から破門された、幽霊屋敷のような貧乏寺である。いつ朽ち落ちても不思議ではないから、女将が首を捻るのも無理はない。

「じゃが、住職殿には一生に一度のチャンスかも知れぬしのう」

それは、確かに事実かも知れない。しかし女将は、ふたりが腰を抜かすようなことを口にした。

「さっき北見さんのお部屋へうかがったら、娘さんのほうはすっかり気に入ったそうですよ、住職さんのことを。目をキラキラさせて、来週の土曜日が楽しみですわ、なんて言ってましたが、どういうことですかねえ」

村長と女将は顔を見合わせて、首を捻った。これもまた、若住職には失礼な話である。

「ところで村長さん、あの噂、お聞きになりました。広見屋敷の」

女将は声を潜めるように言った。

「広見屋敷と」

村長は怪訝な顔で問い返した。

「先月末はもの凄い警備でしたよ。内閣総理大臣の秘書官の方が占い婆のご意見を聞きにいらっしやってたとかで」

占い婆とは、この町の周辺と、霞ヶ関だけで囁かれる都市伝説のようなもので、すべてを見透かす偉大な霊能者のことだ。彼女のことはほとんど知られていない。ただ、広見神社という、あ

まり知られていない社の巫女で、広見屋敷の主である。いづみと呼ばれる孫娘と、鬼頭と呼ばれる運転手が身のまわりの世話をしているというが、なにもかもが噂の域を出ていない。

「しかし、占い婆なんぞ本当に居るものかどうか」

村長は、都市伝説や怪談を楽しむタイプではない。

「だとすると、年に何度も政府の偉い人がこんな町に来る理由が説明できませんよ。こんな、何にもない町に。とくに警視庁の偉いお役人さんは頻繁ですよ。町の人みんな、ひょっとしたら本当に占い婆がいるのかも知れないって話していますよ。もちろん、ちょっとした温泉ぐらいはありますから、有名な温泉街で税金の無駄遣いだとかって叩かれるよりは、こんな無名の町の領収書のほうが煙に巻けるといいますか、わたくしどももご利益を得ていますしね」

そう言って女将は笑ったが、村長は怪訝な顔をしたまま黙り込んでしまった。

占い婆のうわさは、猫ヶ村ではなぜかタブーである。とくに村長はこの話になると露骨に不機嫌な顔をした。逆に若住職のほうは少なからず興味を持っていた。広見屋敷への案内人かも知れないと噂された人物が、何人か立て続けに怪死する事件が起きている。彼らが本当に案内人だったのかはわからないが、案内人は、この付近に数人しかいないと言われている。ある国会議員は、自宅に一人でいるところを刺殺され、部屋中を荒らされたが現金や貴金属に手は付けられていなかった。ある貿易商の男性は、体中に拷問の傷跡を残したまま水死体で発見された。どちらも案内人ではないかと噂された人物である。

案内人の怪死は、広見屋敷に眠る財宝を狙ったサソリと呼ばれる盗賊団の仕業ではないかと噂されている。昨年夏、がけ崩れに巻き込まれた車の中から三人の男の遺体が見つかり、彼ら全員の左腕に、盗賊団のメンバーの印であるサソリの刺青があった。問題はその車中から、広見屋敷について詳しく調べた調査書と、ライフルやナイフなどの武器が見つかったことだ。彼ら三人の身元は未だに判明していない。盗賊団の出現は、少なからず町人を震え上がらせた。

村長宅には、年に何度か、明らかに場違いな高級車が訪ねてくる。だから猫ヶ村の村長こそ広見屋敷への本当の案内人ではないかという噂もある。ただこの村長、若い時分には敏腕刑事として有名だったこともあり、その関係の客ではないかとも言われている。こればかりは後者のほうが真実味がある。ただ、村長は客のことを何も語らない。

新たな客が部屋を訪ねてきた。ついさっき見合いをしていた居酒屋の主、猫頭左門である。女将は軽く頭を下げて部屋を出て行った。女将は、どうも猫頭左門のことがあまり好きではないようだ。

「左門殿、ちと、話がうますぎるようじゃが」

村長は猫頭老人に言った。

「聞き耳を立てておったわけではないが、どうもあの親子は疑わしい。さりとて、猫ヶ寺に古美術商が狙うような品があるとは思えぬし」

猫頭はそう応えて、腕を組んだ。

「お寺にある物はみんな鑑定してもらって、千円以上のものは、村長さんとも相談して全部売ってしまいました。残っているのは、先代の意味不明の変な和歌とか、廊下の壁に埋め込まれた地図とか、そんなものばかりです。はっきり何の価値もないと言われましたし。でも壺や絵など

、少しは値が付くものもあって、全部で五万円ぐらいにはなりました」

猫ヶ寺に高額な骨董品が眠っているわけがない。あったらとっくに売っている。

「村長殿、もしやあの親子」

猫頭老人は急に声をひそめて、村長に顔を近づけた。

「もしやあの親子、静かな場所に住みたいというなら、例の案内人とは関係なからうか」

「まさかのう」

村長は笑って手を振った。

「新たな案内人が赴任してきたと考えれば辻褄があうのじゃがのう」

若住職は、背筋に冷たいものが走るような気がした。

「よもや左門殿までがかのような噂を信じておろうとはのう。とにかく住職殿、慎重に話を進めねばならぬ。ま、飲みなおしじゃ。住職殿も疲れたじゃろう。左門殿もちと付き合え」

と言って、村長は酒と、適当な肴を運ばせた。

若住職には、猫頭老人の言葉が妙に腑に落ちた。そんな馬鹿な、とは思いつつも、さもなくばあんな美女が、こんな寂れた村の、よりによって自分のような貧乏人に会いたいなどと思うはずがない。たとえ思っても、せめて親ぐらいは反対するだろう。しかし北見は反対するどころか、積極的だった。金と嫁を餌に、有無を言わず猫ヶ村へ入り込もうとしているような不自然さすら感じられる。

だから猫頭老人の言葉が腑に落ちる。人目につかぬ過疎地で、たまに外部の者が訪ねてきても不自然ではないところと言えば、寺ぐらいしかない。そんな有人の寺は、この付近では、猫ヶ寺以外にない。

飼い犬の失踪

その三日後、十一月十七日のことである。

猫ヶ村の周辺に点在するある柿の木が収穫の時期を迎える。ほとんどが渋柿だから、干し柿にして出荷し、残った分は翌年のお茶菓子として村で消費する。ひとつずつ皮をむいて、紐で吊るして軒に干す。若住職は脚立に登って柿の実をとる役で、あとの村人三人が皮をむく係である。毎年、この作業に何週間も費やすが、老人にとってはこの手の共同作業は性に合うらしく、およそ千個を超える干し柿が生産される。

柿の木は、山にいくらでもあるが、干す場所は限られてくる。境内にも、庫裏にも、村長宅にも、黒川や千代の家にも、倉庫や空き家にも干す。干し柿作りは干す場所がなくなるまで続けられる。

若住職が脚立を立てて柿の実をとっていると、千代の飼い犬のポチが急に吠えながら道に走り出して、来客を知らせた。見ると、黒塗りのメルセデスが静々と道を登ってくる。運転席の男は若住職に気付くと、サングラスをとって頭を下げた。北見祐次である。若住職は大急ぎで脚立から降り、メルセデスに走り寄った。

「先日はありがとうございました」

若住職が深々あたまを下げると、相手もまた深々とあたまを下げ、

「こちらこそ。それに村長さんにはすっかりご馳走になってしまいましたから、本日はそのお礼に伺いました」

北見は、品良く答えた。

車内を覗き込むと、助手席に菓子箱が置かれていた。娘の由紀は来ていないようだ。

若住職は、北見祐次にはさまざまな疑惑をもっていたが、村長らが干し柿を作っている境内へ丁寧に案内した。

「これは、なんとまた趣き深いお寺でな。歴史に貫禄を感じます」

と、北見は関心したように猫ヶ寺を見上げた。もちろん世辞であろう。これはとんでもない寺だな。修繕に金がかかりそうだ、というのが本音かもしれない。

「それにとっても静かで、空気も美しく、由紀が見たら本当に喜ぶでしょう。由紀のこと、考えては頂けましたか、住職さん」

「え、ええ、もちろん。わたしにはあまりにもったいないお話で、正直に申しますと、少し戸惑っております」

戸惑っているのは、本当である。

北見は愛想よく村長らに頭を下げ、境内の天井をまぶしそうに見上げ、柱を撫で、柿の色艶や大きさを褒めた。誰がどうみても好感の持てる人物だった。村人はみな手を休め、お茶を飲みながら、北見をちらちらと見ながら、遠まわしに本音を探ろうとするような会話を続けた。村長や黒川ばかりか、千代までが若住職とそれほど変わらぬ疑惑を持っているようである。もちろん、それは露骨なものではない。もしも裏になにもなければ、願ってもない話なのだから。

「由紀は少し体調を崩しております、いえいえ、風邪をひいただけですが、用心のため旅館で休んでおります。本日、一度東京に連れて戻りますが、土曜日は由紀がひとりで伺います。申し訳ありませんが住職さん、駅まで由紀を迎えに行ってやってもらえませんか」

「わかりました。楽しみにしています、と、由紀さんにお伝えください」
若住職は答えた。

北見は三十分ほど雑談した後、まぶしそうに村の景色を見まわしながら、来た道を帰っていた。ポチはもう一軽く度吠えたが、北見は恐れるふうもなく頭を撫でようとした。ポチはさっと逃れて、さらに吠え立てた。

「住職殿、すぐに旅館に電話をかけて由紀さんに見舞いの言葉をかけなされ」
「あ、はい」
若住職は、村長の言葉の意味に気付き、すぐに受話器をとった。古い黒電話である。旅館の料理長らしい男性が電話に出た。若住職は、北見由紀さんと呼び出して欲しいと告げた。村長は睨むような顔で耳を近づけていた。

「はい、由紀です」
と、北見由紀は電話に出た。若住職と村長は、ほっと胸を撫で下ろした。若住職は先日の礼と、見舞いの言葉をかけてみた。

「はい、少し風邪気味ですが、来週の土曜日までにはよくなると思います」
と彼女は答えた。村長が代われ、と手で合図した。

「村長の上杉も一言お礼をと申しておりますので」
と言って、受話器を村長に手渡した。村長はついさっき頂いたお茶菓子の礼を述べ、二言三言挨拶の言葉を繰り返して電話を切った。

若住職は、しばらく考えてから言った。
「たしかに、由紀さんの声でした」

若住職の言葉に村長は頷いた。十数年前までは刑事だった男である。受話器を通して他人の声で誤魔化されたりはしない。

「風邪だと言っておったのは、声をごまかす目的ではなかったようじゃ。こればかりは、わしらの考えすぎやも知れぬの」

「つまり村長さんは、手前で由紀さんが車から降りて、北見さんがわたしたちと話している間に村へ忍び込んだ、と疑ったんですね」
村長は頷いた。

「じゃが、それなら犬が吠えるはずじゃからのう。あの娘、しとやかには見えるが、筋肉がしっかりついておる。あれは、鍛えた身体じゃ」

若住職は、それは不自然に思わなかった。若い女性はスポーツをやらない時代ではない。

「ま、ともかく、人は疑うもんじゃねえ。わしは刑事生活が長すぎたし、住職殿は推理小説の読みすぎのようじゃ」

そう言って村長は笑ったが、心から笑っているようには見えなかった。

ところで、その夜に困ったことが起こった。千代の飼い犬のポチが夕食の時間になっても帰って来ない。千代は、わが子のように可愛がっていたが、十八歳を超えた老犬である。目も悪くなっていたようで、どこかに落ち込んだか、大きな犬ではなかったため、急に繁殖したアライグマか、他の動物に襲われた可能性もある。それに、無用心に口には出せないが、北見に始末された可能性も捨てきれない。

千代は、心配のあまり食事も喉を通らないらしく、若住職は、夜遅くまで犬の落ち込みそうな場所を探して歩いたが、月のない夜で、懐中電灯では限界があった。白い犬ならまだしも、濃い茶色の雑犬である。若住職が搜索を諦めて千代の家に戻ったのは、午後九時ごろだった。

「明るくなったら山の中を探してみます」

「すまぬのう」

千代は、力なく言った。ポチの茶碗には、一食分のご飯が盛り付けられていた。

「住職殿。今、酒を温めております。座りなされ」

「お構いなく。もう帰りますので」

若住職が出て行こうとすると、千代はもう一度、座りなされと、強い口調で言った。

ただごとならぬ様子を感じ取った住職は、では、と腰を下ろした。千代は、ハヤの煮付けと、熱燗を出してくれた。彼女は玄関の戸を開いて誰もいないことを確かめてから、若住職の前に腰を下ろし、杯に酒を注いだ。若住職は仏教徒らしく手を合わせた。

「ポチがここへ来たのは十八年も前の話じゃ。町のほうへ三キロばかり行ったところに可愛い仔犬が二匹捨てられておっのう。酷いことをする人間もおるもんじゃ。わしゃ、一度は見ぬふりをして帰ってきたが、どうにも気になって、次の日、せめて餌ぐらはと思うて茶碗にご飯を持って行くと、二匹いたはずの仔犬は一匹になっておっのう、なんぞかに襲われたのかも知れんと思ひ、つい連れて帰ってきてしもうたのが、あのポチじゃ。こんだけ探しておらんということは、もう占い師にでも頼るほかあるまいのう。こんなとき、いづみちゃんがいてくれたらと思ひましてのう」

若住職は、キョトンと千代を見た。

「いづみちゃんって、誰のことですか」

「広見屋敷の、占い婆の孫娘で、わしの幼なじみじゃよ」

広見屋敷の巫女

そして、千代の奇妙な昔話が始まった。

「いづみちゃんと呼んでおったのじゃが。猫ヶ寺の脇の、今はない道をずーっと登って行くと迷路のような道が続いておって、その道はどこをどう通っても迷ってしまう恐ろしい道じゃった。昔の猫ヶ寺の住職殿は、広見屋敷への案内人として知られておって、無事に迷路を抜けられる唯一のお人じゃった」

「ちょ、ちょっと待って下さい。あの、千代さん、広見屋敷って、あの噂になっている広見屋敷のことですよ」

千代は、自分のためのもうひとつ杯を出した。若住職は千代の杯に酒を注いだ。千代が酒を飲むのは珍しい。

「わしが十四の頃まではあった。占い婆さまに会ったことはないし、わしが広見屋敷へ行ったことはないが、広見屋敷には、いづみちゃんという、わしと同年の娘がおった。わしら猫ヶ村の子どもは町の学校に通っておったが、広見村からは遠すぎて、いづみちゃんは通っておらなんだ。わしが六つか、七つのころ、猫ヶ寺で初めて会ったときのことをよく覚えておる」

「ちょっと待って下さい」

若住職は、噂の広見村のことを頭の中で整理してみた。占い婆は広見屋敷の主で、いづみという孫娘がいる。それは現在の話だ。いづみが千代と同年なら、現在のいづみは七十八歳で、占い婆はとっくに死んでいる齢になる。千代に痴呆があるわけではない。千代の話が本当なら、町で囁かれている都市伝説は、そっくり七十年ほど昔の話ということになる。

「孫娘のいづみも霊能力を持っておった。占い婆さまに占いを頼むと、目の玉が飛び出るほど金がかかったが、孫娘のいづみならタダじゃった。ちょっとしたなくし物をしたときなんぞ、状況を話すとピタリと当ててくれたもんじゃ。それに、広見屋敷には政府の要人がアメリカ人を連れて頻繁に通った時期があつてのう。当時は珍しかったチョコレートなんぞも、いづみから貰うて食べたことがある」

若住職は相槌すら忘れて聞き入った。千代の話は一時間ほど続いた。整理すると、次のようなことになる。

当時、というのはおそらく七十年ほど前のことだが、広見屋敷は普通に認知されていたが、その正確な位置を知る者はなく、当時の猫ヶ寺の住職が客から金を受け取って、迷路のような道を案内していた。客は、政府の要職にある人物か、財閥がほとんどだったため、いつも馬車一杯の貢物が運ばれたらしい。猫ヶ村も、広見屋敷の客が落とす金で多少は潤っていた。

広見屋敷は、源平の戦いで破れた平家の一味が、ある高貴な巫女を匿うために人里はなれた山中に迷路を作り、その奥に屋敷を建てたのが発端らしい。ただし、過去に何度も移築され、最初はどこにあったのかはわからない。そうまでして居所を隠す理由は、平家の財宝を預かっているためだと信じられていた。

幼いいづみは、客を案内して帰ってくる住職の馬車に乗せてもらって猫ヶ村へ遊びに来ていた

。帰りは、ずっと幼いころは親切な住職が手を引いて送ってやっていたが、十歳ごろからはひとりで迷路を歩いて帰るようになった。その頃には、いづみの霊能力もすっかり開花していた。

千代が十歳のとき、同じ学校に通う八郎君という男の子が授業中に急に立ち上がり、教室を出て行った。みながキョトンとみていると、バケツに水を汲んできて、前の席にいる小梅ちゃんという少女の頭から水をかけるという事件が起こった。八郎君は優秀な生徒で、家柄もよく、友人にも好かれる好男子だった。なぜそんなことをしたのかと先生にも散々問い詰められたが、ついに何も言わなかった。千代は、どうしても納得できなかった。その日、ちょうどいづみが遊びに来たので、そのことを話した。

「千代ちゃんって、八郎君のことが好きなんだね」

凶星を言い当てられて千代は真っ赤になった。いづみの前では何も隠すことができない。いづみは霊能力で何もかも見透かしている。だから千代は、いづみにだけは本心を話せる半面、いづみに会うのが怖くもあった。

「小梅ちゃんがオシッコを漏らしちゃったの。だから八郎君は水をかけて誤魔化してあげたの。優しい子ね、八郎君って」

その後、何年かして千代は八郎と結婚し、十年以上後にそれが事実だったと知った。

十三歳のころ、千代はだんだんいづみが怖くなった。ある日、いづみが外国のお菓子を持ってきてくれるという手紙が届いたので、何人かの友だちを家に呼んだ。ひとりで会うのが怖かったからだ。かと言って、外国のお菓子はあまりに魅力的だった。それに、いづみの申し出を断ると祟りのようなものが起こるような気もした。ところがその日、年に何度もない大雨が降った。それは見事な土砂降りで、十三歳の女の子が、まさかあんな迷路を通って来られるはずがない。友だちはみな、約束の時間より前に諦めて帰っていった。千代も、いづみは来ないだろうと思っていた。しかし約束の時間に戸を叩く音が聞こえた。いづみだった。ほとんど濡れもせず、足袋も汚さず、白い着物で傘を差して立っていた。千代は、いづみを本当の妖怪だと思い、恐怖のあまり戸を締めてしまった。いづみは何度か戸を叩いたが、やがて諦めて帰っていった。戸口に、約束のお菓子が置いてあった。

そんなことがあってから、千代はいづみに酷いことをしてしまったと自責しながら、同時に祟りを恐れた。いづみに呪われたら自分は死ぬだろうと本気で思った。いつも住職に預けていたいづみへの手紙が出せなくなり、いづみからは一通だけ手紙が届いたが、千代は開封する勇気すらなかった。

それから三年ほどがすぎ、しとしとと雨が数日続いたある日、大地震が起こった。緩んだ地盤や崖が崩れ、収穫期目の猫ヶ村の田畑の多くがつぶれた。家を失った者もいた。道も崩れて不通になり、孤立した猫ヶ村は深刻な食糧不足に苦しんだ。

何日かは耐え忍んだが、いよいよ食糧の備蓄が限界が近づいたある日、もう広見屋敷に頼るし

かないという結論に至ったが、占い婆はキツネだからと言って怖れる者も多かった。ただ、村人は本当に餓えていた。何人かの男が、住職の案内で馬車を引いて広見屋敷へ向かった。そして夕方には、馬車一杯の食糧と、大金を積んで帰ってきた。村人は久しぶりに酒を飲み、餓えた腹を精一杯満たした。占い婆のおかげで猫ヶ村の住民は救われたのである。

ところがその日から、大人たちは誰も広見屋敷という名を口にしなくなった。子どもが口にすると、酷く叱られた。まるで災いを招く呪文か何かのように。それから半年ほど後、猫ヶ寺の住職が倒れて、しばらく後に息を引き取った。千代は、いよいよいづみと連絡をとる手段を失った。広見村の広見屋敷という言葉は完全に封殺された。今でも猫ヶ村ではその名がタブーである。

ただ、千代は今でも疑っている。猫ヶ村の者たちは、本当は広見屋敷を襲って金や食糧を奪ったのではないかと。そのとき、いづみも殺されたに違いない。この祟りはいつか訪れる。そう怯えながら千代は生きてきた。千代は、今でも闇が怖いという。

「これですじゃ」

千代は、すっかり茶色くなった古い和紙の封筒を見せた。若住職は、震える手でその封筒を手にとった。千代ちゃんへ、と美しい墨文字で宛名が書かれ、裏には、広見屋敷いづみと名が記されている。

「これは」

「あの大雨の夜のあとに届いた手紙じゃ。開けておらぬし、返事も出しておらぬ。わしは今でもその手紙を怖れておる。いづみちゃんには、酷いことをしてしもうた」

これこそ、広見屋敷が実在した証拠の品である。

「捨てることもできず、読むこともできぬくせに、さっきまでポチが無事に戻るようにと、この手紙に拝んでおった。この齢になって、忘れておった広見屋敷の噂を聞くようになって、今では」

若住職は、戸口の微かな音を聞き漏らさなかった。若住職は千代を制して声をひそめた。

「外に誰かいます」

ふたりは息を殺した。

「もしかしたらポチが帰ってきたかも知れません。千代さんは動かないで下さい」

若住職は、音を立てぬように腰をあげた。

「もしいづみちゃんなら、どうか招き入れてやってください」

「いえ、そんな非科学的なことが起こるわけありませんから」

そっと忍び寄り、構えてからさっと戸を開いた。

そこに立っていたのは黒川宗太郎だった。

「すまねえ、つい聞いちまって」

千代は、ほっとしたように息をついた。

「ポチを探していたんじゃが、やっぱり見つからん。わしも可愛いがとった犬じゃ。なんとか

亡骸だけでも探し出して、埋葬してやりたいんじゃが」

黒川は、言い訳でもするように言った。

「全部聞きなされたのか、宗ちゃん」

千代は、黒川宗太郎を宗ちゃんと呼ぶ。

「村長さんには言いなさるなよ」

念を押すように千代が言った。

「あ、ああ。もちろんじゃ。最近はおちこちで広見屋敷が噂されるようになって、村長さんもピリピリしておるからのう。じゃが千代さん、あの地震のことでひとつだけ、解せぬことがあるんじゃ」

「解せぬことと」

黒川宗太郎は普段から声の大きな男だが、このときばかりは声を潜めた。

「あの地震の日は、何日か前から雨が降った後の酷い雷の嵐の日で、稲妻が物凄い勢いで何度も何度も光ったのを覚えておる。その後にも先にもあんな酷い嵐なんぞ来ておらぬ。わしは子どもじゃったが、しっかり覚えておる。で、一月ほどして道が通って、学校で地震のことを話したら、みなが口を揃えて、あの嵐の日の地震は、そんなに大きくなかったと言うんじゃ。立っておれぬほど揺れたはずじゃが、皆、ちょっと揺れただけだと言うんじゃ。猫ヶ村の大人はそのこともあんまり口にしながらなんだから、親に確かめることもできなんだが、二里か、せいぜい三里ほどしか離れておらんとところでそう揺れ方が違うとも思えぬ」

黒川はそう言って首を捻った。

「たぶん、このあたりの地盤が脆いだけじゃろう」

「いえ、千代さん。その後もなんとか地震はあったはずですが、この付近だけ大きな被害が出る、なんてことはありませんよね」

若住職は言ったが、よくよく考えれば、子どもは物ごとを大袈裟に覚えているものである。何日か続いた雨で緩んだ地盤は、ちょっとした地震でも崖を崩す。

「わしゃ、あの地震のあと、一度広見村を目指したことがあってのう」

という黒川を、千代は、不思議そうな目を見た。

「あの地震の後、一度だけ、住職さんは広見村へ向かったことがあってのう。そのときわしは」

黒川の話は、千代の話よりさらに奇怪なものだった。

地震が起きたのは千代やいづみが十六歳のころで、つまり黒川が十歳のころのことだった。急に大人たちが広見屋敷や地震の話をしなくなったことが解せい黒川少年は、密かに広見屋敷へ行ってみようと計画を立てていた。

黒川少年のたてた計画は、子どもにしては完璧なものだった。こっそり住職の馬車の後をつけ、岐路に目印の石を落として行くというものだった。真っ黒に墨を塗った石を二十個ほど準備して袋に入れた。地震の後には広見屋敷への客がなくなり、しばらくは住職も馬車を出さなかったが、冬が近づいたある日、中年の女性の客が猫ヶ寺を訪ねるのを見た。

少年はいつでも出動できるように用意していた巾着袋を手に、こっそりと住職の後をつけた。ただ、誤算だったのは、女性客が馬車の荷台に後ろ向きに腰掛けたことだ。客が顔をあげたら追

跡がバレてしまう。やむを得ず、少年はできるだけ離れて馬車を追うことにした。

だから少年は音を頼りに馬車を追った。これは骨の折れる作業で、ところどころ谷水の音に邪魔されて車輪の音が聞こえなくなった。さらに、迷路は思ったより複雑で、数十メートルおきに岐路があり、たった二十個の石ではすぐに足りなくなってしまった。それでも少年は落ち着いていた。近くの木を折って、その葉を目印のかわりにすることを思いついた。馬車を追って最後の石を辻に置くと、急いで常緑樹の枝を折ろうとした。ところが枝は簡単には折れなかった。樹皮がなかなか剥がれない。小刀で樹皮を落として振り返ったころ、馬車の音は聞こえなくなっていた。

それでも少年は冷静だった。こうようにして車輪の痕跡を探した。それはすぐに見つかった。少年は小走りにその跡を追った。新しい馬糞が落ちていたので、少年の自信を強めた。岐路に目印の葉を置き、風はなかったが、念のため葉の上に小石を置いた。そして車輪の後を確認しながら馬車を追った。

追っても、追っても馬車の音は聞こえない。少年は、はっと重大な誤算に気付いた。そこに古い馬糞が落ちていたからだ。ということは、この車輪の跡が、今日のものか、それとも何日か前のものか、はっきり判らない。ルートはひとつとは限らないから、何日か前のものだったら危険である。少年は追跡を諦めて引き返すことにした。それは賢明な判断だった。空を見上げると、ついさっきまで晴れていたのにどんより曇っていた。ゴロゴロと空が鳴り出し、今にも降り出しそうな雰囲気だった。時間的にも夕刻が近づいていた。少年は軽く舌打ちして、来た道を引き返した。今日は諦めても、次のチャンスは必ず来る。

少年は数歩引き返して岐路で立ち止まると、目印の葉を探した。右にも、左にも葉はない。それでも少年は冷静だった。途中で岐路を見落としたようだ。少年はさっきの場所まで引き返すことにした。ぽつり、ぽつりと雨が降り出した。だが少年は落ち着いて迷路を歩いた。歩幅が変われば道を間違えてしまうかも知れない。雲は厚さを増し、迷路は暗さを増した。

この迷路に悪意を感じるとしたら、すべての岐路に同じような枝ぶりのサザンカが植えられている。さらに杉などの常緑樹が空を覆い、路に入る光を制限している。ちょっとした雨をしのぐにはちょうどいいが、陽が陰ると極端に暗くなる。

少年はゆっくりと、岐路を探して歩いた、しかし、辿り着いた岐路にも、置いたはずの目印がない。途中で別の岐路はなかった。考えられる可能性としては、さっきの岐路にあったはずの目印を見落としたということだ。少年はもう一度引き返した。しばらく歩くと、さっきはなかった地蔵が目についた。おそらく気付かなかっただけのことだろう。それを横目にしばらく歩いても、岐路はない。こんなに長く一本道が続くはずはない。少年は少しずつ冷静さを失い、小走りに道を戻った。が、今度はさっきあったはずの地蔵がなくなっていた。

足が震えて背筋にぞっと冷たいものが走った。振り返ると、そこに突如現れたかのように、なかったはずの岐路がある。少年は屈みこんで目印を探した。葉の上に石を置いたせいで見えにくくなったのかも知れない。こうようにして小石と小石の間を念入りに探したが、目印の葉はどこにもない。顔を上げたとき、もう方角は分らなくなっていた。

ついに少年はパニックに陥り、夢中で走り出した。どこをどう走ったかは思い出すことができない。いったいどのくらい走ったかも分らない。岐路という岐路は手当たり次第に曲がった。走っても走っても景色は同じである。暗さから、何度もつまづいて転んだ。ついに息が切れて立ち止まると、少年は真っ暗な迷路の中に立っていた。

少年はその場にうずくまって泣き出してしまった。雨が勢いづき、もう手探りで這うようにしか歩くことができなくなっていた。取り返しがつかない事態だ。少年は大声で叫びながら、這うように手探りで道を進んだ。じっとしていることが怖かったからだ。

「そりゃあもう、怖ろしいもなにもあったもんじゃねえ。じゃが、本当に怖ろしいのはこれからじゃ」

ぼんやりと火の灯りが見えた。少年はビクリと凍りついたが、人間の心理として、その火が正体不明のものでも、暗いほうへ逃げるよりは、明るいほうへ向かう。忍び寄ると、そこに墓石があった。蠟燭がちらちらと燃えている。ついに少年は腰を抜かしてしまった。

しばらくすると背後から、パラパラと雨が紙を打つような音が聞こえてきた。あまりの恐怖に振り返ることもできなくなった。背後の者は、手に灯りを持っているようだ。自分の影が次第に大きくなってゆく。少年は声すら出せず、ただガクガクと震えていた。下駄の足音が、ピタリと、少年の真後ろで立ち止まった。

「どうかしたの、坊や」

声には不気味な美しさがあった。それが恐ろしかった。いづみに違いない、と少年は確信した。

「た、た、助けて下さい」

ようやく声にできたのはそれだけだった。

いづみは、少年の脇を通過して、前にまわった。

「少しお静かになさい。この辺りにはたくさんの兵士がお眠りになっているの」

いづみは、人差し指を唇の前にあてて、少年に微笑みかけた。いづみがどんなに美しくとも、こんなところで、蠟燭の灯りに照らされた顔は妖怪そのものである。

「こっちへ来て傘にお入りなさい。家まで送ってあげるわ」

「い、い、イヤだ」

少年は反射的に毘だと思った。いづみは、そんな少年を見てくすくすと笑った。

「じゃあ朝までここにいなさいね」

いづみは歩き出した。

「ま、待て」

少年は後を追いかけてやろうとしたが腰が立たない。いづみはどんどん先へ歩いて行ってしまふ。少年は四つんばいになって必死にいづみを追ったが、ついに姿が見えなくなってしまった。少年は大声で泣き出した。

「泣くぐらいなら素直について来ればいいのに」

真後ろから聞こえたいづみの声に、ついに少年は気を失ってしまった。

その後のことは覚えていない。自宅の布団の中で目を覚ましたとき、母親が心配そうな顔が見えた。迷路へ行ったことを酷く叱られた。父親にはさんざん殴られ、柿木に縛り付けられたが、その日以降、両親は一度もその話に触れなかった。だから、黒川を助けてくれたのが誰なのか、今も分らない。

「この話をしたのは初めてじゃが」

黒川は情けなさそうに肩をすくめた。あまりに奇怪な話で、千代も、若住職も無言で考え込んだ。

「だったら黒川さんは、生きているいづみさんを見たんですね」

「いやあ、本当にいづみじゃったかどうか。わしゃ、いづみの顔をはっきり知らんでのう。白い着物の、妖怪のように美しい人じゃった。夢じゃったかも知れんと思うこともあるが、夢なら夢で、あんな怖ろしい夢はなかろう」

闇の迷路で墓石に火をともして歩くいづみの姿は、あまり想像したいものではなかった。

飼い犬の死因

その後もポチは戻って来なかった。

十一月二十四日、ついに若住職は土曜日を迎えてしまい、約束の駅へ、約束の時間に、北見由紀を迎えに行った。千代の話を聞いて、少しだけ気が楽になっていた。広見屋敷が実在したのは、どうやら七十年前のことらしい。つまり、今語られている広見屋敷はただの都市伝説である。北見親子の目的は分らないが、もしかしたら、本当にこの静かな村が好きなだけかもしれない。

だとすると、ポチが消えたのは北見親子とは関係のない話だ。

クルマを駐車場に停めた若住職は、駅にあった映画の割引券を片手に改札付近をうろうろし、ベンチに座っている北見由紀を見つけた。彼女は立ち上がってニコリと笑った。先日会った彼女とはイメージが違った。まず服装が違う。ジーンズに真っ赤なコートを着ていた。清楚というより、快活な女性だ。

「先週はごめんなさい。退屈なお見合いだったでしょ」

話し方までガラッと違っていた。

「お父さんは、早くわたしを結婚させたいらしくてね。住職さんには気を悪くしてほしくないんだけど、わたしはどちらでもいいの。結婚しても、しなくても、その中間でも」

その中間とは、どんな意味なのだろうか、と若住職はひそかに首を捻った。由紀は、コートのポケットからタバコを出して火をつけた。

「映画、観に行きませんか」

若住職は町に一件だけの映画館を指さした。由紀は静かに首を振って拒否した。

「悪いけど、家までクルマでおくってくれない」

そう言われて、なぜだろう、と首を捻りながら、彼女を東京の自宅まで送ることになった。

道々の紅葉は美しく、車内での会話ははずんだ。北見由紀は、旅館の女将から広見屋敷の噂を聞いていて、深く興味を持っていた。女将は誰にでもその話をしているようだ。若住職は、千代が語ったことには触れず、噂になっていることだけを話した。

「ただの噂だと思いますよ。寺の庫裏の壁に、昔の、猫ヶ村周辺の地図が埋め込まれています。いくつか集落や、今はない路や神社があったみたいですが、広見村という名前はありません」

「やっぱりただの噂なんですね」

由紀はあっさりそう応えた。

その後、ありふれた世間ばなしの中で、千代の犬が行方不明になったことを話すと、由紀はひどく悲しんで、若住職が心配になるほど黙り込んでしまった。

彼女の自宅はいかにも高級そうなマンションだった。寄って行くように誘われたが、若住職は次の機会にと断った。由紀は別れ際に若住職の耳元で囁いた。

「今度、猫ヶ寺へ行ってもいいかしら」

「いつでもどうぞ」

若住職はそう応えた。彼女は、携帯の電話番号を教えてくれた。それから手を振って、次の約束

も曖昧なまま別れた。

拍子抜けしたデートを終えて、ぐったり疲れた若住職がワゴンを運転して庫裏に戻ったのは、まだ暗くなり切っていない早い時間だった。

疲れてはいたが、懐中電灯を持ってポチを探しにでかけた。これだけ探して見つからないということは、つまり、犬の死体は持ち去られたか、どこかに埋められている。だとしたら犯人は、北見祐次の可能性が高い。村の様子をこっそり調べようと思ったら、犬ほど邪魔な存在はない。殺すのは簡単だ。毒を放り投げてやれば馬鹿犬だから何でも食べる。その後、穴を掘って埋めるよりは、クルマに積んで運び去り、離れた場所に遺棄するほうが人目につきにくい。

若住職は一休みするとワゴン車にエンジンをかけ、町への道を走った。途中、クルマをとめられそうな場所のすべてにクルマを停めて、懐中電灯で照らした。

深夜十二時をまわるところ、若住職はついに犬の死体を発見した。犬は、谷にかかる橋から投げ捨てられていた。若住職はストロボを焚いて現場の写真を何枚か撮り、犬を抱き上げ、夜露を拭いてやり、枕経をあげ、用意していた毛布に包んだ。指紋が残るとすれば首輪しかないが、残念なことに外されていた。犯人は思ったより用心深いヤツかもしれない。

空が白くなる時間まで遺留品を探したが、少なくとも北見がここにメルセデスを停めた形跡も、外された首輪もみつからなかった。ただ、クルマを使って猫ヶ村へ来たのは、最近では、若住職を除けば北見祐次だけである。ポチの胃を調べれば使われた毒がわかるはずだ。若住職は町までクルマを走らせ、村長が起きる時間を見計らって電話をかけた。

「そうか、ご苦労じゃったのう」

村長は、県警の山田という刑事を紹介してくれた。山田以外には何も話すな、と村長は繰り返した。若住職は県警を訪ね、山田刑事を呼び出し、犬の死体を差し出した。山田は村長から連絡を受けていたらしく、両手を合わせて、可哀想にと撫でてから受け取った。若住職は、見合いのためだけに作った名刺箱の中から一枚を出し、山田刑事に差し出した。山田は半分だけ髪の毛の白い、落ち着いた初老の刑事だった。

「北見祐次について調べてみましたが、確かにそういう古美術商は実在しますね。二十五歳になる娘さんもいますが、奥さんとは五年ほど前に死に別れてます。自宅は東京のこの住所です。分譲マンションみたいです」

山田刑事の手帳の覗き込むと、確かに由紀を送って行ったあたりである。

「思い過ごしじゃないですかね、と村長さんには言いましたが、実際に犬が殺されたということになれば、用心に越したことはありません。もちろん、これだけでは警察は動きませんが。大っぴらにはね。念のため、あの親子に結婚詐欺の前科はありません」

若住職は一部始終を千代に話さざるを得なかった。千代は泣かなかった。ただ、何度も礼の言葉を述べた。徹夜あけの若住職はしばらく仮眠をとるつもりで横になったが、うっかり夕方近く

まで寝てしまった。県警の山田からの電話で目を覚ました。

「胃や食道から毒物は検出されませんでした。ただ脊髄を損傷してしまっていて、クルマにぶつけられた可能性が高いですな」

と告げられた。

つまり、犬の死は故意によるものではなく、事故の可能性も出てきた。北見祐次は、帰り道にポチを轢き殺してしまい、やむを得ずクルマに載せて、しばらく走った後、橋から谷底へ投げ捨てた、とも考えられる。もう少し好意的に考えれば、轢いたポチを獣医に運ぶ途中で死んでしまったから、谷底へ投げ捨てた可能性もある。どちらにしても、犬を計画的に殺そうとした場合、クルマで撥ねるといった方法は使わない。つまりポチは、殺されたのではなく、事故で死んだのだ。

広見村があったのは七十年ほど前の話で、犬が消えたのも偶然の事故だとすると、これ以上北見親子を疑う材料がない。由紀は、どうやら親に気がつかっているだけのようだ。あの親子への警戒は解いてもいいだろう。だがそれとは別に、広見屋敷への興味が広がっていた。

若住職は廊下の壁の古地図を目で辿った。猫ヶ村の脇を通る、今はない道を北へ進むと、千代が話した通りの、迷路のような道が細かく描き込まれている。この地図が正確なものなら、少なくとも広見屋敷があった場所に辿り着くことができる。ふと気付くと、迷路の中にいくつか地蔵の絵が描かれている。もしかしたらこの地蔵が目印なのかも知れない。七十年前、迷路を抜けることができたこの寺の住職は、何かを目印にしたはずだ。幼いいづみも迷路を抜けている。他のものには気付かない目印が必ずあるはずだ。それがあの地蔵だとしたら。地蔵のある岐路を、地蔵の向きと同じ方角に地図を辿ると、最後に名前が書かれていない鳥居に着く。他にもいくつか鳥居はあるが、すべてなんらかの名前が書かれている。唯一、例外的に名前が書かれていない鳥居は、この鳥居だけである。つまりこれは、広見神社を示す鳥居ではないのか。広見屋敷は広見神社の手前にある。

若住職は、興奮で高鳴る胸をおさえて、デジカメを構えた。狭い廊下で精一杯離れて、古地図全体が写るように、ズームを精一杯広角側にして古地図を撮った。

若住職は、電話のベルで我にかえった。驚いたことに北見由紀からだ。今、呑み処ネコガシラに来ていて、ひとりで酒を飲んでいるという。

「すぐに行きます」

若住職はそう応えて電話を切った。彼女になにかあったのだろうか。若い女性を居酒屋でひとりにするのは、あまり紳士的でない。酒を飲みたい気分でもあった。由紀を疑ったことについては後ろめたい気持ちもあった。どうせ警察まで犬ポチの遺体を引き取りに行かなければならない。それに、猫頭老人に確認しておきたいこともある。そう思ってデジカメをポケットに入れた。ふと心配になって財布の金を数えた。二人分の食事代を払うと、宿に泊まる分は残らない。もちろん通帳にも余分な金は存在しない。仕方なくワゴン車に布団を積み込んで町へ向かった。

呑み処ネコガシラに着くと、ジーンズに白いセーターの北見由紀が、カウンターで寝ていた。

「お銚子二本ですっかり酔って寝てしもうたわ」

主人の猫頭老人は困ったような顔で笑っていた。確かに二本、お銚子が出ていた。杯にうっすらと、赤い口紅がついていた。若住職が、由紀さん、と肩を揺ると、はい、と寝ぼけた声で応えて、すぐまた眠ってしまった。その寝顔があまりに可愛らしく、若住職は頭をかきながら、その横に腰をおろした。

「猫頭さんは昔、猫ヶ村に住んでましたよね。広見屋敷のことで聞きたいことがあるんですが」

猫頭老人はびくりとして店内を見回した。そして若住職の耳もとに囁いた。

「他の客が帰ってからじゃ」

店の時計を見上げると、十時三十分を指していた。

「その時計は少し進めてある。客が電車に乗り遅れんようにのう」

猫頭老人が言った。若住職は、自分の腕時計を見た。十時二十分だった。

数人いた他の客はそれから三十分ほどでみな帰っていった。猫頭老人は店を閉めた。由紀はまだスヤスヤと眠っている。広見屋敷の話をするとき、誰もが声を潜める。猫頭老人も声を潜めた。

「広見屋敷へ行ったことはないが、いづみという孫娘が千代さんといるところは、遠くからじゃが何度かみた」

千代の話を裏付ける衝撃的な一言だった。

「あの娘はキツネじゃと噂されておって、村の子どもはよう近づかなんだが、千代さんだけが、親しゅうしとったのう」

なるほど、と若住職は頷いた。

「猫ヶ村は地震で壊滅的な被害を受けましたよね。そのことを覚えてますか」

「ああ、覚えておる。確か、酷い嵐の日で落雷がいくつもあった。村のもんはみんな防空壕に避難して被害者はおらなんだ。じゃが、あの地震は猫ヶ村だけで起きたようじゃ。他の地域では被害はなかった。不思議な話じゃがのう」

防空壕以外は、黒川の話と一致する。

「猫頭さん、もしかしたら広見屋敷へ行く方法を、ぼくは見つけたかも知れません」
猫頭老人は真っ青になってまわりを見回した。

「大きな声で言うでねえ。災いが起こるぞ」

「これを見て下さい。古地図です。迷路に、地蔵の絵が描き込まれています」

若住職はデジカメを見せた。

「待て、待て住職殿、滅多なことを言うでねえ。どこに案内人の耳があるとも知れぬ」
猫頭老人は、そう言って眠っている由紀を見た。若住職は首を振った。

「村長さんはまだ疑っているみたいですが、彼女は関係ありませんよ」

若住職は自信ありげに言った。猫頭老人は、来い、と若住職を店の奥へ手招いた。

「村長じゃねえ。さっき刑事がふたり、あの娘の写真を持って聞き込みに来た」

「刑事が、さっき？」

さっきとはつまり、ポチが事故死だと分った後である。

「どうして彼女の写真を？」

「わからん。警察は何も言わなんだ」

猫頭老人は、デジカメに映った地図をモニタ画面上で拡大したり、縮小したりしながら、本当に小さな声で言った。

「盲点じゃったのう。まさか猫ヶ寺にこんな地図が残っておろうとは。確かにこれは迷路の地図じゃ。手柄じゃぞ住職殿。これで広見屋敷の位置が特定できるやも知れん。ぜひ本物を見せてもらえぬか。そうじゃ住職殿、今晚はここに泊まって、明日わしをクルマに乗せて行ってもらえぬか」

若住職の胸は高鳴り、興奮で体が震えた。彼もまた、すっかり広見屋敷の虜になっていたからだが、ここで猫頭老人に協力すると、村長が気を悪くするのは目に見えている。

「でも、広見屋敷は七十年ほど前の話で、たぶん今はありませんよね」

「跡じゃ。みな広見屋敷跡を恐れておるし、探しておるのじゃ。今は言えぬ。詳しいことは、あの娘を旅館に帰してからじゃ。住職殿は、今晚はここに泊まりなされ」

「泊めていただけるならとても助かります。クルマに布団を積んできたくらいですから。じゃあ由紀さんを旅館までおくって、また戻ってきます」

老人は、新品のゴム手袋の封を切って、食器を片付けはじめた。若住職が何度か由紀の肩をゆらすと、やっと由紀は目を覚ました。

「帰りますよ、由紀さん」

由紀は何度か目を擦って、頭が痛いと言い出した。猫頭老人がグラスに水を差し出したが、由紀は受け取らなかった。

「いくらですか」

若住職が尋ねると、猫頭老人は首を振った。タダにしてくれるというのである。

「ホントにいいんですか」

「ああ。そのかわり明日、古地図を見せてもらうぞ」

若住職は、由紀に自分のジャンパーを羽織らせ、彼女の体を支えるようにして、歩いて二分の、町に一件しかない旅館まで歩いた。旅館はすでに灯りを消していた。冷たい風にあたると由紀の頭もしっかりしたらしく、何度か若住職に謝った。若住職には、彼女のその仕草が演技だとは思えなかった。猫頭老人は刑事が聞き込みに来たと言っていたが、恐らく村長の差し金だろう。村長は今も彼女を疑っている。疑いが解けると、なんとも魅力的な女性だ。

「ありがとう」

そう言って、由紀は若住職にジャンパーを返した。ジャンパーを羽織ると、彼女の温もりが残っていた。

「あ、住職さん」

由紀は、頭が痛いのか額に手をあてたまま、帰ろうとする若住職を呼び止めた。

「お店にあったあの白い杯、あれで飲むと悪酔いするみたい」

そんな馬鹿な、と思ったが、若住職は一応頷いた。

「あの杯では、絶対飲まないでね」

まだ酔っているようだ。由紀は、うわ言のように意味不明の言葉を繰り返して言った。

コップ酒をご馳走になりながら聞く猫頭老人の話は、若住職の心をかき立てた。広見屋敷が実在する証拠は何もないが、いづみという孫娘の存在と、広見屋敷から持ち帰った食糧と金品だけは本当のようだ。状況から考えて、広見屋敷が実在した可能性は、ほぼ疑いようがないほど高い。

「住職殿、絶対に他言無用じゃぞ。わしは知っておるのじゃ。見たわけではないが、そうとしか考えられぬ。本当に、誰にも言うでないぞ。すべてがわしの推理にすぎんが、例の地震で壊滅的なダメージを受けた猫ヶ村は、広見屋敷に支援を求めて、当時の住職に案内させて、広見屋敷を訪れると、屋敷は倒壊しておった。広見村と猫ヶ村は、どれほどとも離れておらぬ。猫ヶ村が壊滅的な被害で、広見屋敷だけが無事なわけがなかるう。おそらく占い婆も、孫娘も、あの地震で死んだのじゃ。猫ヶ村の住人がふたりを埋葬したかどうかは知らぬが、蔵から馬車一杯の金品や食料品を持ち帰った」

なるほど。若住職はうなずいた。千代は、猫ヶ村の住人が広見村を襲ったと考えているようだが、こっちの説のほうが気は楽になる。

「で、住職殿、わしは、子どもながらに覚えておるが、持ち帰ったのは馬車一杯の積荷じゃ。わかるな住職殿。持ち帰ることができたのは、馬車に積めるぶんだけじゃ。しかしその後、案内人の住職が病死すると、猫ヶ村の住人は祟りだと確信した。ゆえに猫ヶ寺の脇から続く広見村への道を潰し、その名を封印し、その後、二度と広見屋敷跡に足を踏み入れんようになった」

「つまり、猫頭さん」

若住職の胸は息が苦しくなるほど高鳴った。

「その通りじゃ。当時の住民は餓えておったゆえ、食料品を優先して運び、財宝は改めて、と考えたはずじゃ。善人は、急には強欲になれぬ。要するにその財宝は、今でも広見屋敷跡に眠

っておる。住職殿のこの地図があれば、いつかはその財宝に辿り着けるはずじゃ」

若住職が、飲んだ酒の料金を支払おうとすると、老人は断った。数千円の話をしていただけではない。数億、数十億か、あるいはそれ以上の話をした直後である。むろん、掘り当てることができればの話だが。

夢が広がる反面、村長ら、村の住人がどう思うかが心配になった。若住職の個人的な気持ちを言えば、この老人に同行して広見屋敷を見つけ、過去のロマンを発掘したかった。平家の財宝がどんなものかを思うと、気が狂うほど胸が高鳴った。しかし、若住職の立場で財宝を探すことは許されない。

猫ヶ村殺人事件

若住職は、深夜まですっかり酒をご馳走になり、風呂に入らせてもらい、ふかふかの布団を敷いてもらい、少々の胃もたれと頭痛を残して目覚めた。部屋の時計は七時ちょうどだった。猫頭老人はすでに起きていて、店の厨房で朝食を作っていた。

「朝風呂にでも入りなされ」

老人は言った。若住職は、またしてもお言葉に甘えることにした。ここまで世話になると、これはもう絶対に猫頭老人に協力せざるを得ない。それに猫頭老人が過去の財宝を掘り当ててくれたら、文化的な意味でも猫ヶ村に貢献できる、と思いたかった。

朝風呂に入り、朝食をご馳走になり、新聞を読んだ。八時四十分にはクルマの助手席に老人を乗せて猫ヶ村へ向かった。店の時計は十分進んでいるというから、八時半ごろだったかも知れない。昨夜、ジャンパーのポケットに入れておいたはずの時計が見当たらず、うろうろと探してみたがなかった。たぶんクルマの中だろうと思ってそのままクルマに乗り込んだが、走りながらごそごそを車内を探しても見つからなかった。

「たぶん風呂の脱衣場じゃな。なぁに、狭い家じゃ、すぐ見つかるじゃろう」

「じゃあ、猫頭さんを送ってきたときにもう一度探させて下さい」

空は曇っていた。カーラジオをつけると、猫頭老人がラジオは大嫌いだと言うので、すぐに消した。わりと口うるさい老人だ。

猫ヶ村についたとき、クルマの時計は九時ちょうどだった。

「久しぶりに来るが、景色の変わらぬ村じゃのう」

猫頭老人は、しみじみと言って、あたりの景色を見回した。

「住職殿、ちと村長殿に挨拶をしたい。すまぬがクルマを回してもらえぬか」

おやすい御用だった。歩いても三分で行ける距離である。村長は庭で庭木の手入れをしていた。若住職がクルマの中から軽く会釈すると、村長は手をあげて応えた。猫頭老人が、村長に話があるからクルマで待っていてくれと言って降りた。村長と猫頭老人は、なにやら話しながら村長宅へ玄関から入っていった。どうせ北見親子のことを話しているのだろう。ふたりはいまも疑っている。若住職は車の中で空を見上げた。雨が降るかも知れない、と思うほど曇っていた。

五分ほどして猫頭老人が戻ってきた。若住職は、老人を乗せて猫ヶ村の駐車場にクルマを停めた。

老人を庫裏に案内し、壁に貼ってある古地図を見せた。猫頭老人は、ポケットから虫眼鏡を取り出し、興奮に声を震わせた。

猫ヶ村では、今日も昼から干し柿づくりがはじまる。その前に柿を収穫しておかなければならない。寺の庭の柿の木も、まだたっぷり実をつけたままだ。この仕事は、干す場所がなくなるまで続く。なぜなら、柿の木は無限に近いほどあるのだから。

住職が煎れたお茶を飲みながら、ふたりは地図を眺めた。爪楊枝の先で描いたような細かい線が無数に記され、碁盤の目のような模様を作っていた。

猫頭老人は、古地図をしげしげと眺め、まるで鑑定士のように白い手袋をして、虫眼鏡で覗き込んだ。ところどころに地蔵のような絵が記されている。この地蔵が向いた方角へ進むと、最後に名前のない鳥居にたどり着く。

「七十年も前の地図ですから、もう迷路なんて残ってないでしょう」

若住職は言った。道は数年で草木に覆われる。数年もあれば、発芽した幼木が大木になる。ただ、地蔵だけはその位置に残っているはずだ。

「住職殿、すまぬが、わしをひとりには貰えぬじゃろうか」

若住職は快く承諾した。猫頭老人の興奮は、手に取るように伝わってきた。ひとりでゆっくりと、過去のロマンに浸りたい気持ちは痛いほどわかる。

「じゃあ、ぼくは庭で柿を採っています。何か用事があったら呼んで下さい」

若住職は、そう言って庭へ行き、柿の木に脚立を立てた。

脚立に登ると、いつもは見えない村長宅の黒い屋根瓦が少しだけ見える。千代や黒川の家は杉の大木に遮られて見えない。振り返って停めたクルマを見ると、後部座席のドアが閉まり切っていないことに気付いた。ルームランプが点きっぱなしになるとバッテリーを消耗する。

若住職は脚立から降りてドアを閉めた。ボタンと、大きな音が響いた。そう言えば昨夜から布団を積みっ放しにしている。触ってみると、曇ってはいても、車内にあると多少は温くなるものらしい。どうせならもう少し車内に置こうと思った。

若住職はしばらく渋柿の収穫を続けた。柿を詰めた三つのコンテナをクルマに積み込むために、昨夜から積んだままの布団を庫裏に運んだ。布団はひんやり冷たかった。そろそろ昼食の時間だろうか、と左腕を見ても、いつもの腕時計がない。庫裏の時計は十時半で止まったままだから、見る意味がない。猫頭老人は、虫眼鏡で熱心に地図を辿っていた。彼の夢を邪魔せぬよう、音を立てぬようにそっと歩いた。

「住職殿」

猫頭老人が、虫眼鏡から顔を離して若住職を呼び止めた。

「やはり、住職殿の申した通りじゃ。この迷路は、地蔵の次の岐路で、地蔵が向いた方角へ進むと、この鳥居へたどり着くように組まれておる」

老人の声は、心なしか震えていた。若住職も古地図を覗き込んだ。

「まだ地蔵が、そのまま、その位置に、その方向を向いて残っておればの話じゃがの」

「でも、簡単に風化するものじゃありませんし」

「住職殿」

「はい」

老人の目は潤んでいた。

「今夜は、祝杯をあげぬか。最高の美酒を持って参った」

猫頭老人は、鞆から日本酒の小瓶をかかげて見せ、杯をふたつ出して手袋を脱いだ。若住職はにっこりと頷いた。

「では、今晚は猫頭さんがここに泊まって下さい。わたしは警察でポチの遺体を引き取ってきますので、ここで待って下さい」

「おう、それはご苦労じゃな」

猫頭老人は、若住職の耳元に囁いた。

「地図のことも、わしがここにいることも、絶対他言するでないぞ」

「分ってますよ」

若住職が答えた。

「絶対に、誰にも言うでないぞ」

猫頭老人は、怖いほど顔を近づけて、低い、凄みの効いた声で念を押した。若住職は、軽いため息を漏らして、何度も頷いた。

そこへ、ドタドタと黒川が転がり込んできた。

「大変じゃ。大変じゃ、住職殿。村長殿が、殺されておる」

三人は村長宅へ走った。若くて足腰の丈夫な若住職が最初に玄関から飛び込むと、土間で仰向きに倒れた村長の前で、千代が腰を下ろして手を合わせていた。首にロープのようなもので閉められた跡がある。

「おお、住職殿」

千代が顔をあげた。その目が涙で濡れている。若住職は、村長の左手をとって脈をみた。手は冷たかった。脈はない。腹部にはまだ体温を残していた。若住職は、村長の苦しげな表情に手を合わせてから受話器をとり、警察に連絡した。

警察は三十分で来た。山田刑事が、後輩の金子刑事を連れて若住職に敬礼した。若住職は、仏教徒らしく手を合わせて敬礼に応えた。山田刑事にとっても、村長は尊敬する先輩だったらしい。

怒りと悲しみが、若住職の頭脳に活力を与えた。鑑識のストロボが何度も焚かれる遺体の側に、1メートルほどの真新しいロープが落ちていた。おそらくそれが凶器だろう。

「とくに荒らされた形跡はありませんが住職さん、なにか、気付かれたことはありませんか」
山田刑事は、落ち着いた声で若住職に尋ねた。若住職は、冷静に村長宅を見回した。見慣れた土間には、なんとなく、いつもとは違う違和感があった。

「何か足りない気がするんですが。それが何だか分らなくて」

山田刑事が静かに微笑んだ。

「では住職さん、目を閉じて下さい。そして、記憶にある土間のことを話して頂けませんか」

若住職は目を閉じた。

「玄関から土間に入ると、すぐ左に草刈機をかけてありました。その横にちょっとした机があって、灰皿と、黒い電話が置かれています。壁に大きな電話帳がかけてあります。村長さんは老眼が酷いので」

「何色の電話帳ですか」

山田刑事が尋ねた。

「黒です。大きな、見出し付きの住所録です」

若住職は目をあけて壁を指差そうとすると、電話帳は消えていた。

山田刑事は、千代、黒川、猫頭老人、若住職の順に話を聞いた。

なるほど、疑わしくない順ということらしい。若住職は苦笑した。非力な千代には、比較的大柄な村長を絞め殺すことなど見るからに不可能だし、黒川は、村長と似たような体格だが腰が悪く、筋力も衰えている。背後から襲えば不可能ではないが、殺す理由は思い当たらない。疑わしいとすれば、久しぶりに村を訪れた猫頭老人と、若くて体格がよい若住職であろう。

若住職は、猫頭老人の横顔を盗み見た。人口たった四人の平和な村に部外者が入り込んだ日、殺人事件が起きた。だから猫頭老人が犯人だとまでは言いたくないが、疑わしいことは確かだ。

町の診療所から北原という医師が、警察と一緒に来ていた。顔見知りである。

「死亡推定時刻はもう分りましたか」

若住職が北原医師に尋ねた。

「九時四十五分から、十時十五分までの間です」

若住職は頷いた。少なくともその時間、猫頭老人は庫裏にいた。

千代の話は簡潔だった。朝は六時ごろ目を覚まして、七時ごろには黒川と一緒に朝食をとった。千代と黒川の家はとなり同士で、もう何年も、料理の作れない黒川の食事を千代が用意している。朝食を終えると、畑に出て草むしりなどをし、しばらくして黒川とお茶を飲んだ。時間は覚えていない。この村で農業をしている限り時間は意味を持たない。明るくなれば朝だし、暗くなれば夜である。疲れれば休憩するし、体が休まれば仕事を再開する。お茶を飲んだ後、しばらく畑仕事をした後、再び黒川と昼食をとると、ふたりは連れ立って村長宅を訪ね、遺体を発見した。

「村長さん宅にはどんな用事で」

山田刑事が穏やかな声で尋ねた。

「はい。毎年この季節は干し柿を作りまして。猫ヶ村中の柿の木の実を住職殿に採ってもらって、わしら三人で皮を剥いて、軒に干しております。先日まで猫ヶ寺や庫裏の軒先に干し終えて、昨日から村長さんの屋敷の軒に干しております」

「ええと、つまり、共同作業で干す場所に集まって皮を剥くというわけですね」

「そうですじゃ。昼過ぎの暖かいとき、三人であれやこれや話しながらのんびり皮を剥くのが、もう何十年も前からの習慣でございまして、半分楽しみのようなもんですじゃ」

千代はしみじみと言った。

「大変失礼なことを伺いますが、今朝十時ごろは、どちらにいらっしゃいましたか」

「時計は見ておりませんが、たぶん畑におったか、茶を飲んでおったか、そんなところでございましょうかのう。宗ちゃんが、黒川宗一郎がずっと近いところにおりました。宗一郎は、縁側で柿を吊るす縄をなっておりましたゆえのう」

千代が話すところによれば、細かい時間のことは知らないが、黒川は藁を打ち、一週間分ほどの縄をなっていた。それが終わると庭木の剪定をしていた。ずっと見ていたわけではないが、どこへも行かなかったと思う。ときどき話もした。午前中、訪ねてきた者はいなかった。猫頭老人が来ていたことも知らなかったし、若住職の車がいつ帰ってきたかも知らない。千代の家からも、黒川の家からも、猫ヶ寺や、村長宅は死角になる。

「最後にひとつ。村長さんのご遺体を発見されたとき、あの壁に住所録はぶら下がっていましたか」

山田刑事は尋ねた。千代は首をひねり、気付かなかったと応えた。

黒川の話も、ほぼ一致した。千代と朝食をとった後、藁を叩いて縄をない、適当な時間に千代とお茶を飲み、その後は庭木の剪定もしたが、どこへも出かけなかった。千代もまた、ずっと畑にいた。時間は分らないが、正午に近い時間より少し前、千代と昼食を食べて、なった縄と、皮を剥くための包丁を二本持って村長宅を訪ねた。その縄と包丁は、村長宅の玄関先にまとめて置かれていた。山田刑事は、念入りの縄と包丁を調べたが、とくに変わったところはなかったようだ。

「で、大急ぎで猫ヶ寺へ行って、住職殿に知らせたんですじゃ。そしたら」

黒川は、ちらと猫頭老人を盗み見て、それ以上なにも言わなかった。

「猫ヶ寺へ行く前に、あの壁にぶら下がっていた住所録には気付きましたか」

黒川はしばらく考えた。

「おお、確かなくなっておったのう」

「どうしてそれに気付きましたか」

山田刑事は身を乗り出した。

「いや、猫ヶ寺へ走っていくより、電話をかけたほうが早いと思うた。わしは腰が悪いのでのう。じゃが住所録が見当たらんで、電話番号も覚えておらぬし、結局走って知らせに行きましたかのう。確かになかったようじゃ」

猫頭老人は、広見屋敷に耐えられぬほど興味を持ち、若住職に頼み込んで地図を見せてもらったところまでを淡々と語った。九時ごろ村長と会ったし、若住職の見合い相手の北見親子のことを少し話したという。ただ五分程度で、若住職を待たせていたのですぐに別れて出てきた。その後はずっと猫ヶ寺で地図を見ていた。一度も外へ出なかった、と応えた。

「住所録は壁にかかっていたか」

山田刑事の質問に、猫頭老人は記憶にないと答えた。

若住職も、猫頭老人とほぼ同じことを話した。九時ごろ、クルマの中から村長に軽く会釈した後、猫頭老人を車に乗せて猫ヶ寺へ向かった。老人とお茶を飲み、その後、猫ヶ寺の庭で柿を採っていた。その間、猫頭老人はずっと庫裏の中にいた。出口は一箇所しかなく、一度も出て来なかった。

「しかし住職さん。猫頭さんのアリバイはそれで証明されますが、住職さんだけは、十時前後のアリバイがありませんよね」

「ですが、わたしは鋏を使って柿を採っていました。そのカチカチという音はずっと途切れなかったと思います。猫頭さんが証明してくれるんじゃないでしょうか」

しかし猫頭老人は、古地図に夢中だったため、鋏の音のことは記憶にないと答えた。

「ええと、少し話を戻しますが、住職さんは、昨夜は猫頭さんの家に泊まって、今朝は一本道を通って最初に村長さんのお屋敷の前にクルマを止められたのですね。そして、村長さんと猫頭さんが話す間、クルマで待っていたわけですね。村長さんと、猫頭さんが話していたのは、九時から九時五分ごろで間違いありませんね」

「そうです。クルマの時計で確認しました」

「猫頭さんが住職さんの家から出て来られたとき、住所録か、それを入れる袋のようなものを持っていませんか」

若住職は目を閉じて考えた。

「何も持っていなかったと思います。村長さんは老眼がひどくて、かなり大きな住所録を使っていました。サイズにするとB4ぐらいあります。そんな大きなものを持っていけば気付いたはずですよ」

山田刑事は、なるほどと頷いた。

「村長の上杉定雄さんは、とても優秀な刑事でした。あの方は、とても住職さんのことを信頼しておりました。そして、住職さんのことをとても大切にしていました。身寄りのない方ですからまさかと思い、上杉さんが懇意にされていた行政書士に連絡をとってみました。案の定、遺言状を遺されていました。遺産の受取人にあなたが含まれていますよ、住職さん。このこと、ご存知でしたか」

若住職は、ビクリと身を震わせた。

「いえ、知りません。でも知っていたとしたら、わたしには動機があるということですね」

山田刑事は頷いた。

「山田さんは、わたしを疑っていますか」

「今のところ、全員を疑っています。村に、こちらの四人以外の第三者が入ってきた形跡はありません。つまり、住職さん、千代さん、黒川さん、猫頭さん、この四人の中に犯人がいるはずですよ。それが誰なのかは、今のところさっぱり分かりません。黒川さんと千代さんは、事実上夫婦のような間柄です。互いのアリバイを証言していますが、証拠としての価値は低いですね。住職さんはアリバイがありません。今のところ確実にアリバイがあるのは、猫頭さんだけです。住職さんは空のほうを向いて柿をとっていたので、こっそり抜け出すことも不可能ではありません。それに、こんな小さな村ではよくあることですが、全員が口裏を合わせていることもあります。だから、わたしは四人全員を疑っています」

金子刑事が来て、山田の耳元になにやら囁いた。山田は眉を寄せた。

「海外か」

「はい。アメリカです」

「どういうことだ」

山田刑事は、険しい顔で金子が差し出した資料に目を落とした。

「住職さん。村長の上杉定雄さんは、アメリカにお知り合いがいましたでしょうか。上杉さんの電話の通話記録によりますと、ほとんど毎日のように国際電話をかけています。今朝も九時四十分にかけています。殺される少し前ですね」

若住職は首を捻った。そんな話は聞いたことがない。

「いえ、さっぱり見当が付きません。なにかの間違いじゃないでしょうか」

山田刑事は、しばらく無言で顎を撫でていた。

「住職さん。もうひとつ、見て頂きたいものがあります」

山田刑事はそう言って、村長の遺体かけられた布を捲くった。

「白いシャツの襟に、赤い塗料のようなものがついているのですが、これはなんでしょう」

山田刑事が指差したシャツの襟に、たしかに赤い塗料のようなものがついていた。血ではない。もっと鮮明な、ピンクに近いマゼンタだ。若住職は何も答えられなかった。

「いえ、けっこうです。間もなく鑑識が割り出してくれるでしょう」

その時、村長宅の電話がけたたましく鳴った。皆、凍りついたように電話を見つめた。山田は、金子に目配せし、電話に出ると指示した。はい、と金子は低い声で電話に出た。

「は、はい。少々お待ち下さい」

金子は顔を真っ青にして受話器を押さえた。

「あ、あの、村山警視総監です。山田先輩に代わるようにと」

「警視総監だと。わたしにか。なぜだ」

山田刑事は受話器を受け取り、二言、三言話した。その顔がみるみる蒼白に変わった。最後に畏まりました、と一礼し、電話を切った。

「住職さん。わたしには何が起きているのかさっぱり分かりません。つい先ほど、警視庁に連絡が入ったそうです。広見屋敷が猫ヶ村に使者を向かわせたと。全員、広見屋敷のいづみさまの指示に従うようにと、警視総監から直々に命令を受けました。いづみさまは、間もなくこちらに着かれるそうです」

広見屋敷のいづみ

黒いワンボックス車の運転席から降りてきた物騒な体格の男は、後部座席のスライドドアをうやうやしく開いて頭を下げた。誰もが息を飲む中、そこから出てきたのは、白い着物の若い女性だった。誰もが、当然の成行のようにその美しさに目を奪われ、言葉を失った。白く透き通るような肌に、ホモサピエンスの遺伝子が生み出す芸術の極みが集約されていた。が、その唇から漏れた言葉は、意外といえば意外だし、自然といえば自然だが、横柄だった。

「山田という者はおるか」

山田刑事が進み出て、敬礼した。

「小生が、刑事の山田でございます」

いづみは山田を見て、ゆっくり頷いた。

「わたしは広見屋敷のいづみ。ご隠居の遣いできた。おまえがこの場の責任者だと聞いている。ことの詳細を話すが良い」

若住職は、いづみの美しさに心を打たれたがも、周辺を観察する冷静さを残していた。皆、啞然としていづみを見つめている。千代だけは祈るように手をあわせて震えていた。山田刑事は淡々と、そつなく、これまで起こったことを話した。町で囁かれる広見村の噂のことから始まり、若住職の見合い話のこと、村の犬が死んだこと、北見親子のこと、千代の証言、黒川の証言、猫頭の証言、若住職の証言など、手帳を読み上げるように淡々と伝え、ついさっき警視總監から電話があったことまで、何も漏らさず、私情をはさまず、事実だけを簡潔に話した。いづみは、不敵な薄笑みをうかべながら、山田の話を聞いていた。

その後、若住職がいくつかを補足を加え、すべての情報がいづみに伝えられた。それは即ち、これをお読みの方が得た情報以上でもなければ、以下でもない。

「町にはその旅館も含めて、宿泊施設は一件しかないのですね。ならばすぐにその旅館に連絡し、昨夜北見由紀という女が泊まったか、すぐに確認しなさい」

この村は携帯が通じない。山田に命じられ、金子は村長宅の電話で旅館に問い合わせた。

「わたしにはひとつだけ腑に落ちぬことがある。おそらく偶然だとは思いますが、仮に偶然でなかったとしたら面倒ね。万が一にも北見由紀がその旅館に泊まっていたら、誰かが犬を殺したことになる」

いづみは、さっぱり意味の分らないことを独り言のように言った。

「北見由紀の宿泊と、犬とが、いったいどう関係あるというのですか」

問う山田を、いづみはあっさり無視して、ひとりで考え込んだ。山田はそんないづみを見つめている。電話を切った金子が、おそるおそる話しかけた。

「あの、先輩。あの旅館に、若い女性の客がなかったかと何度も確認いたしましたが、昨夜は休業日で、若い女性どころか一件の客もなかったと言っております」

「だ、そうです。広見屋敷さま」

山田は、いづみを見て言った。少し不貞腐れているようだ。

「そう。だったら、もう充分よ。犯人が分ったわ」

山田と金子が目を見合わせ、居合わせた者みな、ざわめいた。

そして、いづみの言葉に導かれて、猫ヶ村殺人事件は解決することになった。

「その前に、ひとり足りないわね。何人が警官を行かせて、猫ヶ寺のどこかに隠れている女性を捕らえなさい。ただし、手荒なことはしないように。暴れるようなら手錠をかけて連れてきなさい。暴れなければ丁重にご足労願いなさい。全員揃ったら犯人を教えてあげる」

「ご命令の通りにしろ」

山田刑事は、待機していた警官全員に向かって言った。

「あ、ついでに、庫裏の時計が何時を指しているか見てらっしゃい。それからデジカメで廊下の壁の古地図を撮ってきなさい。廊下だからあまり下がれないかも知れないけれど、ズームを広角側にして、できるだけ全体が写るように」

いづみがそう言うと、鬼頭がひとりの警官にデジカメを差し出した。

「ご命令通りにしろ」

山田が怒鳴ると、何人かの警官が猫ヶ寺へ走った。

「ちょっと待って下さい、いづみさん」

思わず、若住職がいづみに声をかけた。

「猫ヶ寺に隠れている女なんていませんよ」

いづみは、興味深そうに若住職を見た。

「あなたが、猫ヶ寺の住職さんね」

警察の関係者に向けるような命令口調ではなく、もう少し穏やかな声だった。

「でもね住職さん。あなたの証言が教えてくれたことです。あなたの頭がもう少し良ければ、クルマの中の布団が温かった時点で、誰かが隠れていたって気付いたはずですよ。ってというか、開けた覚えのない後部座席のドアが半開きになっていたら、普通は気付くわね。クルマのドアは、開けるときは小さな音だけど、閉めるときは大きな音がします。古い車はとくに。あなたのクルマの中の布団に隠れていた女は、猫ヶ寺の駐車場でそっと抜け出したけれど、音が心配でドアを閉めることはできなかった。そう考えるのが自然ですよ」

今から思えば確かに不自然ではあったが、まさか人が隠れていようとは夢にも思わなかった。

「では質問させて下さい。仮にわたしのクルマに誰かが隠れていたとして、どうして女だって分るんですか」

若住職は、思わずムキになって問い返した。いづみは、こっちへいらっしゃいというふうに手招いた。彼女は村長の遺体に向けられた布を捲って、手を合わせた。誘われるように若住職も手を合わせた。

「女でなかったら、村長さんのシャツの襟についていた口紅をどう説明するの。見たところ、千代さんはノーメイクのようだし、オカマはいないようだし」

「口紅」

若住職と、ふたりの刑事は同時に、それぞれに口から同じ単語をつぶやいた。たしかに、これは口紅という、この村に存在しないはずのものである。

しばらくして、後ろ手に手錠をかけられた北見由紀が、警官に連行されてきた。

「ずいぶん暴れたようですね、北見由紀さん」

由紀のところどころ破れたジャケットや、乱れた髪、警官の顔の擦り傷などが、乱闘の跡を物語っていた。由紀は、ちらと若住職を見たが、すぐに目を逸らせた。

いづみは、皆をぐるりと見回して静かに微笑んだ。

「それでは皆さんが揃ったところで、謎解きを始めましょう」

猫ヶ村殺人事件の解決

みなが固唾を飲む中、いづみは村長の遺体の周辺を歩きながら言葉を続けた。

「まず、この遺体の不自然なところを説明しましょう。犯人がロープを使って人を絞め殺す場合、常識的には背中から襲うはずで、結果として被害者はうつ伏せに倒れるはずですが、この遺体は仰向けに倒れています。それから、この手の犯行では、ロープを首に巻いたままにするのが普通です。そうでなければ蘇生してしまう可能性があるし、なにより一刻も早く現場を離れたい犯人が、わざわざ首からロープを解くことはありません。つまり、犯行の後で、死体を仰向けにして、首からロープを解いた人物がいることになります。その人物は、人工呼吸と心臓マッサージで村長さんを蘇生させようとしたのですが、ご高齢の方ですし、発見が早かったにも関わらず呼吸は戻りませんでした。そしてその人物は、住所録を持ち去ったのです。その人物が北見由紀さんであることは、村長さんの襟についた口紅と、実際の彼女の口紅を調べればはっきりするでしょう」

北見由紀は、不貞腐れたように下を向いたまま、否定も肯定もしなかった。確かに、見たところ彼女の口紅の色は、村長の襟についた口紅と全く同じ色である。

「北見由紀さん、あなたは昨夜、酔ったふりをして住職さんに旅館まで送ってもらった後、こっそり猫頭老人の店に戻り、ふたりの会話を聞きましたね。たぶん仕掛けた盗聴器の電波を受信したか、裏口から店に忍び込んだか、それに類似した方法でふたりの会話を聞いて、猫ヶ寺へ忍び込む方法を思いつきました。そして次の日の朝、住職さんのクルマに忍び込んで、布団の中に隠れました。違いますか、由紀さん」

北見由紀は軽く舌打ちして、諦めたように頷いた。

「お見事ね、広見屋敷さん。正確には、盗聴器を持ち合わせていなかったのだから、ボイスレコーダーをカウンターの下に隠しておいて、あとで忍び込んで再生したわ」

ふたりの女性は、お互いを睨み合った。

「あなたの最初の計画は、旅館が休業日の夜に居酒屋で酔いつぶれたふりをして最終電車をやりすごす。親切な住職さんが、まさか女性を夜道に放り出すはずがありません。やむを得ず庫裏に泊めてくれると思ったのでしょうか」

「ぴったり正解よ」

「あなたの目的は、猫ヶ寺の庫裏の廊下の古地図でした。ところが、その古地図は住職さんのデジカメに写っていることが分って、あなたは計画を変更しました。わざわざ猫ヶ寺へ忍び込まなくとも、そのデジカメのメモリカードさえ盗み出すことができたならと考えました。住職さんは休業日とも知らず、あなたを旅館まで送ってってくれました。そのときあなたは、幸いなことに住職さんからかけてもらったジャンパーのポケットから、デジカメを抜き取り、さらにカードを抜き取ってデジカメだけ元に戻しました」

北見由紀は、もう一度頷いた。

「そしてその夜、データをコピーして、ぐっすり眠っている住職さんの枕元のジャンパーの中のデジカメに戻しましたね。そうじゃなかったら、あなたに疑いの目が向けられてしまいます

から。あなたは、住職さんのことはすっかり騙したけれど、村長さんにはまだ疑われていましたからね。村長さんなら必ず気付くでしょう」　いづみは、唇に笑みを残しながら北見由紀に言った。

「そうね。気付くでしょうね」

北見由紀は、敗北をかみ締めるように言った。

「鬼頭、タバコを頂戴」

鬼頭が礼服の内ポケットから自分のものらしい、あまり若い女性に似合わぬ銘柄のタバコを差し出した。彼女が口にくわえると、今度はうやうやしく火を差し出した。いづみは、気持ちよさそうに煙を空に吐き出した。

「あなたも吸う」

いづみは由紀に声をかけたが、彼女は首をふった。

「ところで由紀さん、ちょっと左肩を見せて頂けないかしら」

さすがの由紀も、この言葉にビクリと身を震わせた。

「あなたはお見合いの当日、はじめて村長さんに出会ったとき、季節はずれにも、肩を出したワンピースを着ていたそうね。サソリのメンバーは全員、左腕にサソリの刺青があると聞いていますが、化粧で一時的に隠して、さり気なく左腕が見えにくい位置に座れば、いくら村長さんでも気付かないでしょう。そして、その後もサソリとあなたたちを結びつけて考えることはなくなります。事実、村長さんはすっかり騙されていたみたいですね。サソリではなく案内人の関係者だろうと疑っていたようです。さあ、北見由紀さんの手錠をはずして差し上げなさい。サソリの刺青、見せていただけるかしら、北見由紀さん」

警官のひとりが、北見由紀の手錠を外した。しかし由紀は、首を振って拒否した。

「構わん。そのコートを脱がせろ」

山田刑事が怒鳴るように命じた。

「待ちなさい。イヤだって言ってるでしょ。まったくおまえたちは、デリカシーのないゴロツキどもね」

いづみに怒鳴られると、山田は恐縮して頭を下げた。

「ま、いいわ。あなたがサソリの一員かどうかは、この事件には関係ないことですから」

いづみが浮かべた笑みに応じるように、由紀も不敵な笑みを浮かべた。

「あのう、由紀さん。ぼくの時計を隠したのも、あなたですか」

若住職が、気になっていたことを尋ねた。母の大切な形見である。由紀は無言で首を振った。

「いい質問ね、住職さん。時計のことは後でわたしがちゃんと説明してあげます」

いづみは、そう言って住職を黙らせると、由紀を見ながら話を続けた。

「猫頭左門さんと、住職さんの話を盗聴したあなたは、猫頭さんもまた、広見屋敷の財宝を狙っていることを知りました。たぶんあなたも、デジカメの画像から古地図の暗号を解いたのでしょう。あの古地図は、庫裏の廊下に埋め込まれている限り、近くからしか見ることはできないけ

れど、もし離れて見る事ができたら、迷路の線は大きな文字に見えます。デジカメの広角レンズで撮影すれば全体を見ることができます。正確な地図なんかじゃなくて、地図をカモフラージュした暗号です」

警官がいつみに、庫裏で地図を撮影したデジカメを差し出した。山田と金子、そして若住職はいつみの後ろに回って、小さなモニタに表示された画像を覗き込んだ。「宝八寺ノ下」と文字が浮かび上がっていた。

「思った通りね。今もまだ、その財宝が寺の床下にあるかどうかは知らないけれど」
由紀が、悔しそうに唇を噛んだ。

「由紀さん。あなたは住職さんのデジカメにメモリカードを返す前に、住職さんのカメラで画像を表示して気付いたのでしょう。あなたは再度予定を変更しました。こっそりクルマの中に隠れて猫ヶ寺へ入り込みました。その理由を、住職さんに聞かせてあげたらどうですか」
由紀は、ふんと鼻で笑った。

「さて、次に住職さんの時計が消えた理由を説明しましょう。まず、住職さんにお尋ねします。今朝は、何時に起きましたか」

「七時ぐらいです」

若住職は答えた。

「どうして、七時だと思いましたか」

「どうしてって、部屋の時計を見たからです」

「腕時計は見なかったのですか」

「腕時計は、たぶんジャンパーのポケットに入っていると思ってましたんで」

若住職は、いつみの質問の意図がわからず、どぎまぎしながら答えた。

「あなたの起床時間は午前八時です。部屋の時計は、一時間進んでいました。それにジャンパーのポケットにも腕時計はありませんでした」

「でも、その後お店の時計も、クルマの時計も見ましたが、だいたい符合しました」

「あなたの目に触れる時計はすべて、一時間進めてあったのです。ただ、電波時計だけは進めることができなかつたので、猫頭左門が隠したのです」

若住職が猫頭老人を見ると、彼は顔を真っ青にしていつみを睨んでいた。

いつみは、そんな猫頭左門をまっすぐに指差して声を張り上げた。

「猫頭左門、おまえが犯人よ。この強欲の下衆野郎め。者ども、この殺人鬼に手錠をかけよ」

警官らは、弾かれたように老人を取り囲み、老人の両手に手錠をかけた。

「欲のために人命すらあっさり奪うこのヒトモドキは、死亡推定時刻になる午前十時のアリバイを作るため、住職さんの目に触れるすべての時計を進め、村長に会ったのは午前九時だと若住職に錯覚させて、アリバイをでっち上げたのです」

しかし、猫頭老人は低くふふふと笑った。

「証拠はおありかな、お嬢さん。よければわたしの家や店を調べて頂いて結構じゃ。時計が細工

されているかどうか」

いづみは、居直る老人に冷笑を向けながら、ひとりの警官を指差した。

「おまえに庫裏の時計を確認してくるように命じたはずだが、何時を指していた」

「小生が確認いたしましたところ、九時三十分でありました」

警官の返答に、いづみはにっこりと満足げに笑みを浮かべた。

「住職さん、庫裏の時計は十時三十分で止まっていたはずですね。なぜ九時三十分を指しているのかしら。答えは明白です。猫頭が進めたのです。なぜなら、止まった時計は、偶然にも、実際に近い時刻を示していたから、時計が動いていると勘違いしたのです。だから、ひとりにしてくれと頼んで、時計を遅らせたのです。馬鹿の落ちそうな落とし穴よね。証拠ならもうひとつあるわ。住職さんのクルマの時計は、元に戻す暇がなかったはず。だから一時間進んだままになっているはず。なんなら確認に行かせましょうか」

いづみは、取り押さられた猫頭老人を見下ろしながら話を続けた。

「猫頭左門、おまえはクルマの中で住職さんがラジオをつけようとする、露骨にイヤな顔をしたそうだけど、そこまでラジオの嫌いな者は珍しい。住職さんは気付かなかったけれど、荷台に隠れていた北見由紀さんは気づいたらしいわね。午前十時、住職さんの車から降りて村長さんと挨拶をし、ちょっと話があるとかなんとか言って土間に入り、そこで背後から村長さんを襲ったおまえは、被害者の首にロープを残したまま、何食わぬ顔で住職さんの車に戻った。

ところが、おまえの計画に気付いた由紀さんは、住職さんのクルマから抜け出すと、すぐに村長さん宅に駆けつけ、彼の死体を発見した。北見由紀さんは、大急ぎで首のロープを解き、人工呼吸と心臓マッサージで蘇生を試みたが、村長さんは息を吹き返さなかった。口紅は、心臓の音を確認するために胸に耳をあてたときついたものよ」

北見由紀は、無言でいづみを見ていた。

「ところで由紀さん、あなたは村長さんと広見屋敷との繋がりを疑っていましたね。だから村長さんの住所録を盗みましたね」

北見由紀は、不貞腐れたような笑みを浮かべて頷いた。そんな由紀を見ながら、いづみは言葉を続けた。

「確かに、村長さんは広見屋敷の電話番号を知っていました。警視庁にお勤めのころ、何度か電話をかけてきたことがありました。わたしがずいぶん幼い頃ですけどね。だけど住所録には書いてなかったはず。用心深い人でしたから。それ以前に、その電話番号はとっくに変わっていますけどね」

「名前のない国外の番号があったわ。それじゃないのかしら」

ついに、北見由紀が口を開いた。

「たぶん、海外に住む知り合いに中継を頼んだんでしょう。村長さんは、広見屋敷にアクセスしようとしていたみたいですね。村長さんは先月、庫裏の廊下を改装した際、壁から古地図を外しました。そのとき、至近距離からでは絶対解けない暗号に気付いたのでしょう。村長さんは、財宝を広見屋敷の継承者に返そうとしたのかも知れませんが。警視総監経由で連絡が入ったのは、ついさっきのことでした。もう少し早く連絡がついていれば、命を落とすこともなかったはず。とても残念です」

いづみは声を落として言った。

いづみはカラ、カラ、と下駄を鳴らして、取り押さえられた猫頭老人の前へ行き、軽蔑するように見下ろした。

「ところで、この男は住職さんまで殺そうとしていました」

「ど、どういう意味ですか」

若住職は血の気を失った顔で言った。いづみは、若住職を見ながら続けた。

「居酒屋で由紀さんが酔いつぶれる芝居をした日、彼女の触った杯の指紋を消さないように保存し、今日、猫ヶ寺へ持ってきています。毒の入ったお酒と一緒にね。住職さんを殺して、その罪を由紀さんに着せようとしたのです。もちろん財宝を奪うためです」

いづみの言葉を聞いて由紀が笑った。

「でも、所詮は馬鹿老人の浅知恵ね。わたしは帰る直前に指紋を全部ふき取ったわ」

北見由紀が愉快そうに言った。

「由紀さんは、だからあの日、あんなこと言ったんですか。あの杯は悪酔いするとか、あの杯では飲まないでとか」

北見由紀は頷いた。

「念のためにね。まさか自分の店で住職さんを殺すことはないと思ったけど」

「あ、ありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいのか」

迂闊だった。ついさっき、猫頭老人が出した杯がそれだ。

「ま、殺されなくて良かったですね、住職さん」

いづみは、からかうような口調で言った。

事件は解決した。

猫頭老人をパトカーに乗せた後、山田刑事はいづみの指示を仰いだ。

「北見由紀のほうは、いかがいたしましょう」

いづみは、その美しい顔で山田を睨んだ。

「結婚を前提にお付き合いしている恋人の家に遊びに来た人を、逮捕できるわけないでしょ、阿呆ども」

「は、ごもっともでございます」

山田刑事は、いづみに深く頭を下げた。

「ところで由紀さん」

いづみは口調を変えて、北見由紀に話しかけた。

「これからどうするおつもりですか。サソリは、失敗したあなたたち親子を生かしてはおかないでしょう。よろしければ、広見屋敷が保護いたしましょうか」

北見由紀は、しばらく考えてから答えた。

「では、お言葉に甘えて、お世話になります」

「因みに、あなたたちは本当の親子ですか」

北見由紀は首を振った。

いづみは、今度は若住職に向かっていった。

「村長さんの葬儀の喪主は、あなたですか」

若住職は頷いた。

「はい。たぶんそうなると思います」

「鬼頭、あれを」

鬼頭が、礼服の内ポケットから出したものは香典袋だった。名は広見屋敷とだけ記されている。若住職は手を合わせてから受け取った。

「あのう、いづみさん。住所とかを、教えて頂けないでしょうか」

「え」

「いえ、あの、香典返しの発送先なんですけど、名刺でも頂ければ」

「あなたは、広見屋敷の住所を教えろと言うのですか」

「あ、いえ、あのう、無理ですよ」

「当たり前でしょ」

いづみは、なんとなく不機嫌な声で言うと、皆を見回し、深く頭を下げた。

「鬼頭、帰ってビールでも飲むわよ」

由紀を手招いて、クルマに乗り込もうとするいづみに、千代が声をかけた。

「いづみちゃん。わしじゃ、千代ですじゃ。幼なじみの千代ですじゃ」

いづみは、首をかしげながら眉間にしわを寄せた。

「失礼ですが、七、八十歳の方とお見受けいたします。二十四歳のわたしの幼なじみではないでしょう。それに、わたしは幼いころアメリカで育てております」

千代は、キツネにつままれたような顔でしばらくいづみを見ていたが、

「おお、そうですじゃ。いくらなんでも、あのときのいづみちゃんが、まだこんなに若いわけがありませんのう。これは失礼なことを申し上げました。お許しください。ただ、本当にそっくりなんですじゃ。わしの幼なじみの、わしの知っている広見屋敷のいづみちゃんと、瓜二つなんですじゃ」

千代は、そう言って祈るように手をあわせた。

そんな千代に、いづみは意外なことを告げた。

「わたしの祖母は、昔、猫ヶ村にひとりだけ友だちがいたけれど、寂しい別れ方をしてしまったと申しておりました。祖母は、現在の広見屋敷の主で、わたしたちのご隠居と呼んでおりますが、世間で言う占い婆です」

千代も、黒川も、若住職も、周辺を取り巻く警官も、みな聞き耳を立てた。

「そのお方は、ご隠居様は、お元気でございましょうかのう。わしは昔、ご隠居様に不義理をしてもうてから、頂いた手紙も恐ろしゅうて未だ読めず持っております」

千代が言った。

「祖母は、すっかり足腰が弱って、最近では出歩くこともございせんが、頭のほうだけは健在なようです。祖母の手紙、今からでも遅くはありません。ぜひ開封してあげてください。よろしければわたしが開封し、読みましょう。ここで待ちます。その手紙を持ってきて下さい」

いづみの言葉遣いは、相手によってガラリと変わるらしい。警察に対しては見下すように横柄だが、千代に対しては丁重で、優しさすら感じられる。

「その手紙、ぼくがとって来ます」

そう言って、若住職は千代の家まで走った。鍵はかかっていない。玄関を開けようとする、クゥーン、クゥーンと、甘えるような犬の声が聞こえた。ポチだ。若住職は目を疑った。では、警察に検死を頼んだあの犬の遺体はなんだったのか。若住職はすっかり弱った老犬を抱き上げた。

一刻も早く千代に知らせてやりたかったが、まずは千代の冷蔵庫から犬が食べそうなものを勝手に出して食べさせてやった。それから仏壇の前のいづみの手紙を持って、犬を千代の家の中に閉じ込めて、皆が待つ村長宅へ走った。

犬のことを告げると、黒川と千代は目を丸くして驚いた。

「わたしが腑に落ちなかったのは犬のことだけです。じゃあやっぱり、死体で見つかったのは別の犬だったわけですね。死んだのは、たぶんその犬の兄弟犬でしょう。十八年前、千代さんが最初に仔犬を見つけたとき、仔犬は二匹いましたよね」

千代は言葉もなく頷いた。

「これでスッキリしたわ。邪悪なものがわたしたちをミスリードするために犬を隠したのでしょう。村へ侵入しようとしているものが犬を殺すはずがありません。仮にわたしが犯人で、猫ヶ村に侵入しようと思ったら、犬を一時的に連れ去るか、薬で眠らせるでしょう。殺してしまえば疑われて、余計に警戒されてしまうでしょうから」

「まったくその通りね。住職さんとデートした日、犬がいなくなったと聞いてとてもショックだったわ」

北見由紀が言った。若住職は、そのときのことをよく覚えている。どうして知りもしない犬のためにこんなに悲しむのだろうと思ったものだ。

いづみは、若住職から受け取った古い未開封の封筒を、あっさりと開封した。そして読み上げた。

「千代ちゃんへ。先日の大雨の日は驚かせてしまっておめんなさい。みんな、わたしが広見村の広見屋敷に住んでいると思っているけれど、今の広見屋敷は、誰も住んでいません。わたしは、すぐおとなりの猫ヶ寺に住んでいます。だから、濡れもしないで千代ちゃんの家へ行くことができたのです。これから書くことは、とても大切なことなので、ちゃんと最後まで読んでください。

大東亜戦争で、大日本帝国軍のために情報を収集したり、合衆国の暗号を解読してきた広見屋敷は、今では両国の大変なお荷物です。ただ、表立って消し去ることはできないので、たぶん、雷雨に乗じて膨大な資料とともに焼き払うつもりでしょう。そのときは地盤の弱い猫ヶ村にも被害が出るはずですよ。占い婆は、猫ヶ村を修復するためのお金と、当面の食糧を猫ヶ寺の軒下に隠しました。近いうちに夜の雷雨があったら、それに乗じて空軍が来ます。千代ちゃんは、他の人と一緒に防空壕に隠れて、絶対外に出ないで下さい。

わたしと占い婆は、ずっと西にあるスイスという国の銀行に財宝を預けて、数年後に日本へ戻ってきますが、たぶん、もう会うことはありません。あなたたちの安全のために、これから先ずっと、絶対に、広見屋敷の名前も、わたしの名前も口にしないで下さい。

と言っても、あなたは死ぬまでこの手紙を開封できないと思うけれど、でも、もし読んでくれたら、この手紙を燃やして下さい。

それじゃあ、さようなら、千代ちゃん。お元気で。いづみ」

読み終えたいづみは、鬼頭に目で合図を合点した。鬼頭が内ポケットからライターを出して、火をつけた。いづみは手紙をかざし、指先まで燃え広がったところで手を離れた。ひらひらと落ちる火の、最後の一片が尽きるのを見定めると、いづみは誰にともなく頭をさげて、由紀を連れてクルマに乗り込んだ。警官らの敬礼に見送られて、クルマは走り去った。

おわり